

仏教遺跡と対比して、18世紀末に建立されたイスラム建築様式の蘇公塔を訪ねた。トル

ファンえみんの群王であった額敏は当地の反乱を鎮圧し、清朝の忠誠を誓って建立されたモスクである。干しレンガを見事な幾何学模様そこうとうに組み、高さ50m以上もあるかと思われる円錐の塔を尖頂まで積み上げ構築されていた。傍らに教室もあったが偶像崇拝を禁じているイスラム教だけに内部は空っぽだった。新疆ウイグル自治区は昔から各種の宗教が並存し、イスラム教、チベット仏教、仏教、道教、キリスト教等々が混在しているが、イスラム教は彼等の社会生活の中で大きな影響力を持っている。塔に登って一望すると砂漠とオアシス、そして一面の葡萄畑が見下ろせた。

ウルムチで新疆民族博物館や、トルファンのアスターナ古墳群で砂に埋もっていたミイラを目の当たりに見た。全く干物同然でこんなにも完全な姿を留めていることが不思議に思った。聞くとところによると、エジプトは内臓を取り出して死者を埋蔵するが、ここではそのままという。発見された後の保存処理もさほど配慮している様子もないのに、腐敗しないのはよほどミイラにとって環境条件が整っているのであろう。

トルファンから夜行寝台列車に乗って夜11時前に出発し敦煌に向かった。翌日の午前11時近くに着いたが、とにかくゆっくり走るので揺れも少なくよく眠った。昭和30年代、ちょっと贅沢だった国鉄の3段ベットの寝台列車でよく出張させられた。当時は横になって目的地に行けるだけでありがたかった。そのことを思うと何10年ぶりに乗る2段ベットは清潔で快適だった。

とに角行けども行けども、ゴビ砂漠を幕進する。実はゴビと砂漠は違って、ゴビは砂利や砂礫のことで、細砂を砂漠をいうから、果てしないゴビを通り抜けて列車が走ったと言うべきだろう。

さて、敦煌は自然遺産と文化遺産の両方を備えた素晴らしい街である。

砂礫が堆積し砂で覆われた美しい砂丘の

めいさざん  
鳴沙山を訪ねた。昼夜の温度差が大きく、

日中は砂が焼けて登れないし、風が来ると

砂塵が舞い大変だが、めったに降らない雨が朝から降ってお湿りもあり涼しく幸運だった。鳴沙山の麓に3000年来涸れたことの無い泉、月牙泉までラクダに乗り鈴の音を聞きながらのんびり砂漠を愉しんだ。「沙山は泉を有し、泉は沙山を映す」を実感した。

